

キャリア意識の向上を目指した入学前教育の実践

| | |
|-----|---|
| 著者 | 藤田 大雪, 知念 葉子, 吉田 咲子, 加藤 千恵, ライト キャロリン |
| 雑誌名 | 京都光華女子大学京都光華女子大学短期大学部研究紀要 |
| 号 | 56 |
| ページ | 131-139 |
| 発行年 | 2018-12-01 |
| URL | http://id.nii.ac.jp/1108/00000921/ |

キャリア意識の向上を目指した入学前教育の実践

藤田大雪
知念葉子
吉田咲子
加藤千恵
ライト・キャロリン

I はじめに

2014年に公表された中央教育審議会の「高大接続改革答申」は、これからの時代に求められる「基礎的な知識・技能」「思考力・判断力・表現力等の能力」「主体的に学習に取り組む態度」という「学力の三要素」が高等学校教育と大学教育に浸透していないことを指摘し¹、それらを培うために高校教育、大学教育、大学入学者選抜を三者一体で改革するよう求めている²。この提言の背景には、「知識量のみを問う「従来型の学力」」³ではグローバル化の時代に対応できなくなるため、「年齢、性別、国籍、文化、障害の有無、地域の違い、家庭環境等の多様な背景を持つ高校生一人ひとりが、高等学校までに積み上げてきた多様な経験や能力」⁴を正しく評価し、それを伸ばすような教育が行われなければならないという危機感がある。

この答申を受けて、京都光華女子大学（以下「本学」）でもさまざまな教育改革が推進されてきた。たとえば、(1) 2014（平成26）年度に採択された大学教育再生加速プログラム（AP）の計画に沿って、授業と授業外学習支援の改革を通じて「アクティブラーナー水準」（AL水準）を伸ばす教育の枠組みを構築する⁵、(2) 大学での専門教育の内容に関心を持たせるために高校に授業科目を提供する、(3) 入学前課題を実施する、などがそれである。

本稿の主題である入学前課題として、本学では、2013年から専門業者が提供する「指定教材」を各学科で実施してきた。一方でキャリア形成学科は学科の学びの内容として「ビジネス」「ホスピタリティ」「ソーシャル」の3つの領域を設置しており、幅広い志向性をもつ多様な学生が在籍している。そうした学生の個性や能力を伸ばし、将来の職業への方向づけや意志決定を早期に行うためには、学生の学習意欲にあった、

学科独自の入学前課題が必要だと考えられた。こうして2016年度に、併設校である京都光華高校からキャリア形成学科への内部進学者を対象として、学科独自の入学前課題が開発・実施される運びとなった。

この2016年度の入学前課題については、前稿（藤田ほか；2017）で取り組みの紹介と調査分析を行った。ここでは詳細を繰り返さないが、結論だけを述べると以下のようにまとめられる。(1) 学科独自の入学前課題の取り組みは「高大接続改革答申」で示された改革の精神に合うものである。(2) キャリア形成学科への内部進学者が入学前教育に求めるのは、高校の学習の反復ではなく、大学の学びの準備あるいは先取りとしての役割である。その意味でも2016年度の入学前課題が目指した方向性は正しかった。(3) しかし積極的に課題に取り組めない生徒もいた。これは課題の目的が十分に説明されず、また内容面でも大学の学びを意識させるには不十分な点があった結果、課題が「高校の学びの反復」と捉えられたためである。

翌2017年度は、上記の考察を踏まえて課題の改善を行い、7名の内部進学者に対して新たな入学前課題を実施した。以下はこの新課題の概要と成果の報告である。

II 2017年度の入学前教育課題の概要

2017年度の入学前課題では、前年度のふり返りをもとに、大学での専門的な学びへの導入という目的を課題に浸透させることと、課題についてしっかりと説明する機会を設けることの2点を意識してプログラムの開発を行った。本章では、はじめに課題の概要を紹介しながら目的の明確化のための工夫を示し、次に実施スケジュールの説明を通して「目的の説明不足」という問題にどう対処したかを述べる。

1 課題の概要

キャリア形成学科は、「ビジネス」「ホスピタリティ」「ソーシャル」という3つの領域にもとづいて学びたい科目を選択し、現代を生きる女性としてのキャリアを築くことができる学科である。そこで入学前課題の内容も、現代を生きる女性の生き方や働き方について考えさせ、職業意識の醸成をうながすことを意図して作成することとした。具体的な内容は、(1) 物語の内容把握と感想を求める課題（以下「日本語課題」）、(2) 同じ物語にもとづく英語課題（以下「英語課題」）、(3) 卒業生へのインタビューを読んだ感想（以下「インタビュー課題」）、(4) 2016年度と同じ新聞を要約する課題（以下「新聞課題」）である。

(1) 日本語課題

入学後に文章の内容把握とライティングのスキルが必要となることから、課題図書を理解した上で要約と感想を書く課題を作成した。指定した図書は、イギリスの児童文学作家であるダイアナ・コールスの童話『アリーテ姫の冒険』（グループ・ウィメンズ・プレイス訳、学陽書房、2001年）である。この図書を題材にした理由は、この物語が文章として読みやすく、かつ女性の生き方について考えさせる内容であったからである。配布教材には「なぜ『アリーテ姫の冒険』が『課題』に？」と題して、この課題に取り組む生徒たちに向けて以下のようなメッセージを記載した。

この物語は、日本語版では『アリーテ姫の冒険』、英語版では『The Clever Princess』といます。

多くの人たちに愛されている物語に登場する「お姫さま」や「プリンセス」は、優しく素直でおしとやかで、そして何より、綺麗な顔立ちをした女性たちです。外見よりも勇敢であることを期待されている「王子さま」に比べて、なんという違いでしょう。

アリーテ姫は普通のプリンセスとは違います。男の子のような恰好をしているし、父親である王様の言うことは聞かないし、結婚なんかしたくありませんと宣言してしまうし……。

それなのに、アリーテ姫は毎日とても楽しそうです。そしてアリーテ姫の周りには、アリーテ姫のことを気に入った人たち、動物たちが集まってきます。

それはなぜでしょうか。

私たちキャリア形成学科の教員は、皆さんたちに、「女性だから」という枠に自分をはめずに、アリーテ姫のような自由な発想で、様々なことにチャレンジして、困難なことにも取り組んでほしいという願いを込めて、この物語を題材に選びました。

課題は、「物語を理解するためのポイント」（参考資料1を参照）について考えを深めた上で、三部構成で、1000から1800字で要約させる形式にした。これは物語の理解をうながすことで要約の質を高め、同時に大学でのレポートにも通じる三部構成を意識させようという工夫である。同様に感想の問題も、いきなり感想を求めるのではなく、「『アリーテ姫の冒険』は、あなたの生き方や、あなたの将来を考える上で、どのようなことを教えてくださいか」など、女性の生き方や働き方への問題意識を喚起する3つの小問に答えさせた上で（参考資料2を参照）、800字から1200字の感想を書かせる形式にした。

(2) 英語課題

『アリーテ姫の冒険』は原作の英語版も国内で入手できるため、対訳での内容理解が可能であり、英語課題としても適当であると考えた。『アリーテ姫の冒険』に関する英語課題は3つの大問から成る。原文からの抜粋を記載し、それについて小問に答えさせる形式が2問と、英作文の問題が1問である。最初の2問は、内部進学者にも他の入試区分で入ってきた者と同じ経験をさせたいという意図から、本学の一般入試のレベルとスタイルに合わせたものにした。英作文の問題は、“Do you think Arete (アリーテ姫) is a good role model for girls and young women?”という問いについて、80語から100語で意見と理由を書けというものである（「ロールモデル」という単語については別の箇所に説明がある）。この問題にも日本語課題と同様に、アリーテ姫の物語を通して女性としての生き方や働き方を考え、キャリア形成学科での学びに意識を向けさせようという意図が込められている。

(3) インタビュー課題

入学後のロールモデルとして、各種業界で活躍しているキャリア形成学科1から3期生の卒業生5名（ビ

ビジネス領域:1名、ホスピタリティ領域:3名、ソーシャル領域:1名)に対してヒアリング形式のインタビューを行い、その内容を編集して、「先輩からのメッセージ」として課題に追加した。課題文の「先輩からのメッセージ」はQアンドA形式であり、5名の卒業生がそれぞれ3ページで、現在働いている業界の現状や仕事内容、自分の大学時代のことや後輩へのメッセージなど、6から7項目の質問に答えている。いずれのメッセージにも、将来の職業に対するイメージの具体化につながるエピソードや、大学生活における実践的なアドバイスが満ちており、大学での勉学に対して高校生のモチベーションを向上させる内容になっている。課題は、この5名のメッセージを読んで、それぞれ200字程度で学んだことや感想を書くよう求めるものである。言うまでもなく、この課題は現代を生きる女性の生き方や働き方について考え、職業意識を醸成させるためのものである。

(4) 新聞課題

新聞課題については、前年度の内容を継続して実施した。これは毎週1本の新聞記事を選び、記事の内容を200字程度でまとめた上で、選んだ記事とキャリア形成学科の学びがどのように関わるかを書かせるというものである。この設問に対しては、前稿でも紹介したように、課題を受けた生徒から「学科の学びとのかかわりを書けというのが、何を書いたらいいのか分からず、内容が薄くなってしまった。感想や意見だともう少しくましく書けたと思う」という感想が寄せられていた⁶。しかし、2017年度の新課題では卒業生へのインタビュー記事を読ませ、キャリア形成学科の学びや職業への意識を喚起しているため、新聞課題に対する生徒たちの意識にも何らかの変化が見られるのではないかと期待があった。

2 実施スケジュール

次に入学前課題の実施スケジュールを説明する。以上の4種類の課題は、高校側が冬休みの三者面談で配布し、1月から2月の過ごし方について、保護者とともに話し合いを行った。対象者は、2018年度に京都光華高校から本学キャリア形成学科に内部進学した生徒7名である。さらに、課題の目的を説明できなかった前年度の反省から、高校の登校日に合わせて1月

25日に学内の教室で説明会を実施して、入学前課題の趣旨と目的、課題への取り組み方や注意点、課題に関する質問ができる学習相談会の案内、提出の締切についての注意などの説明を行った。なおこの説明会には高校教員の協力もあり、病気で公欠した1名を除いて全員が参加した。

大学に早期合格した高校生には学習意欲の維持が重要であり、また一般に学習は短期集中で取り組むよりも間隔を開けて継続的に行うほうが効果的であることから⁷、課題の提出日は複数回に分けることが望ましい。そこで『アリーテ姫の冒険』を扱う日本語課題と英語課題を「課題1」とし、高校の最後の登校日である2月27日を提出日とした。インタビュー課題は「課題2」、新聞課題は「課題3」として、大学入学前のオリエンテーションのある3月31日を提出日に指定した。どちらの課題も入念な添削の上で返却を行った。前年度の課題で生徒たちが添削内容にほとんど目を通していなかった反省から、「課題1」は3月31日に返却し、課題の見直しをさせた上で簡単なリフレクションを書かせた。「課題2」と「課題3」については、入学後に初年次ゼミで担当になった教員が添削し、各自の責任でアフターフォローを行った。

以上の課題のうち、2月27日締切の「課題1」(日本語課題と英語課題)は、高校教員の協力もあり、全員が期限内に提出できた。やや難易度の高い英語課題の英作文問題に一部未回答の者がいたものの、その他の点では全員が規定を守って課題を完成させた。3月31日締切の「課題2」(インタビュー課題)と「課題3」(新聞課題)は、7名中5名が期限内に提出し、1名は後日に提出を行った。

III 取り組みの評価

1 調査の概要

課題提出時に、取り組みの評価のために質問紙による調査を行った。質問の内容は、それぞれの課題の「満足度」「量」「難易度」「面白さ」を5件法で問い、満足度の理由を自由記述で答えさせるというものである。さらに、入学後2ヶ月を経た2018年6月に、15から20分程度で課題に関する聞き取り調査を個別で行った。聞き取り調査での主な質問項目は「良かった課題はどれか」「その理由は何か」「不満に感じた点は

あるか」「入学前課題をやって良かったと思える点はあるか」などである。回答者数は、「課題1」への質問紙調査が7名中7名、「課題2」と「課題3」への質問紙調査が7名中5名、入学後の聞き取り調査が7名中6名であった。

2 結果と考察

質問紙調査の結果は以下の通りである。以下、この結果と自由記述、および聞き取り調査の結果にもとづき、「現代を生きる女性の生き方や働き方について考えさせ、職業意識の醸成をうながす」という目標に対するそれぞれの課題の貢献を考察する。

表1 課題にどれくらい満足しているか (対象者7名)

| | 課題1 (アリーテ姫の冒険) | 課題2 (卒業生のインタビュー) | 課題3 (新聞の要約) |
|-----------|-------------------|---------------------|----------------|
| 満足 | 0 | 1 | 1 |
| やや満足 | 4 | 4 | 0 |
| どちらともいえない | 3 | 0 | 3 |
| やや不満 | 0 | 0 | 0 |
| 不満 | 0 | 0 | 1 |

表2 課題の量はどうか (対象者7名)

| | 課題1 (アリーテ姫の冒険) | | 課題2 (卒業生のインタビュー) | 課題3 (新聞の要約) |
|----------|-------------------|----|---------------------|----------------|
| | 日本語 | 英語 | | |
| 多かった | 0 | 0 | 2 | 1 |
| やや多かった | 1 | 2 | 3 | 4 |
| ちょうどよかった | 6 | 5 | 0 | 0 |
| やや少なかった | 0 | 0 | 0 | 0 |
| 少なかった | 0 | 0 | 0 | 0 |

表3 課題の難易度はどうか (対象者7名)

| | 課題1 (アリーテ姫の冒険) | | 課題2 (卒業生のインタビュー) | 課題3 (新聞の要約) |
|----------|-------------------|----|---------------------|----------------|
| | 日本語 | 英語 | | |
| 難しかった | 1 | 3 | 0 | 2 |
| やや難しかった | 1 | 2 | 3 | 3 |
| ちょうどよかった | 3 | 2 | 2 | 0 |
| やや易しかった | 2 | 0 | 0 | 0 |
| 易しかった | 0 | 0 | 0 | 0 |

表4 課題の面白さはどうか (対象者7名)

| | 課題1 (アリーテ姫の冒険) | | 課題2 (卒業生のインタビュー) | 課題3 (新聞の要約) |
|-----------|-------------------|----|---------------------|----------------|
| | 日本語 | 英語 | | |
| 面白かった | 1 | 1 | 1 | 0 |
| やや面白かった | 2 | 2 | 3 | 0 |
| どちらともいえない | 4 | 4 | 1 | 5 |
| ややつまらなかった | 0 | 0 | 0 | 0 |
| つまらなかった | 0 | 0 | 0 | 0 |

(1) 日本語課題

日本語課題では、女性の生き方について考えさせるという課題の目標に対して一定の効果が確認された。たとえば、「『アリーテ姫の冒険』の物語の内容が、女の人=弱い・働かないというイメージを壊しているところが面白かった」(聞き取り調査での回答)と、女性についての固定観念が揺さぶられたことを語る声が聞かれたほか、「困難を自分の力で解決し、自分の手で幸せをつかんでいくアリーテ姫は心の美しい女性なので、私もアリーテ姫のような自信でみちあふれるしっかりとした女性を目指したいと思った」「初めて読んでアリーテ姫のような女性になりたいと思った」(いずれも自由記述欄での回答)というように、アリーテ姫に自己のロールモデルを見いだした生徒もいた。このように、アリーテ姫の生き方に対する考察をきっかけに女性としての自己のあり方を省みた生徒がいたことは、「『女性だから』という枠に自分をはめずに、アリーテ姫のような自由な発想で、様々なことにチャレンジして、困難なことにも取り組んでほしい」(課題の説明文からの引用)という課題作成者の思いがある程度伝わったことを示している。

なお、この課題には、指定図書『アリーテ姫の冒険』が児童文学であることに疑問を感じる生徒が出ないかという懸念もあった。だが、実際に「やや易しかった」と回答した者こそ2名いたものの(表3)、自由記述欄に「少し話が簡単なのに考えることは難しかった」と書かれていたように問題が頭を使わせるものであったためか、課題自体に不満を感じた者はいなかった(表1)。

(2) 英語課題

英語課題では、“Do you think Arete (アリーテ姫) is a good role model for girls and young women?”という英作問題を通じて女性の生き方を考えさせている。おそらくこの問題が難問であったために、7名中5名が英語の課題について「難しかった」または「やや難しかった」と答え(表3)、うち3名は英作問題にまったく手をつけない結果になったと考えられる。一方で問題に取り組んだ4名は、アリーテ姫の行動を分析した上で、そこから自分が何を学び取ったか、学んだことを自分にどう生かせるかといったことを十分に考察できていた。以上のことから、英語課題は、英

作問題に手を付けず入試と同じ形式の問題のみに取り組んだ者にはどのような効果が得られたか不明であるが、すべての問題に取り組んだ者には求める効果が得られたと言える。

(3) インタビュー課題

インタビュー課題はすべての課題の中で最も評価が高く、質問紙調査に回答した5名全員が「満足」または「やや満足」と答えている(表4)。ただし、調査に回答しなかった2名のうち1名は問題に手を付けず、「インタビューは情報量が多すぎて、読むのが大変だった」(聞き取り調査での回答)と答えている(残りの1名も課題未提出)。

自由記述の内容では、「これからの大学生活がよりイメージできた」「先輩の話をきけて将来を考えるきっかけになった」「どういう風に大学生活を過ごしたら良いか大体把握できた」「先輩達がどういう学生生活を送っていたかがわかった」など、大学での学びに対する意識の向上を示唆するコメントが多く見られた。さらに、入学の2ヶ月後に行った聞き取り調査では「意識の向上」以上の効果も見いだすことができた。たとえば、以下の語りは「職業意識を醸成する」という所期の目的が達成されたことを極めて明確に示している。

先輩のインタビューは、将来に何がしたいか決まっていなかったから参考になった。働き方とか、ブライダルやファッションに興味があるから、Nさんのインタビューはとくに参考になった。将来の進路を考えるうえで、特別な知識がなくてもビューティーコンサルタントになれることを知れてよかった。

また、次の例はインタビュー課題への取り組みによる意識の変化が入学後も持続的な影響を与えうることを示す語りである。

やってよかったのは先輩のインタビュー。先輩の話を読んで、大学生活のアドバイスに「なるほどなあ」と思った。とくに参考になったのがウェディング、ブライダルの人。「自分もこうなりたい」と思ったわけではないが、コミュニケーション力の大切さを教えてもらった。おかげで、大学に入って変わったと思う。飲食のアルバイトをしていますが、小さい子がいたら声をかけるとか、客のこと

を見て何が喜ばれるのかを考えるようになった。

以上のように、インタビュー課題では、大学の学びへの意識の向上、職業意識の醸成、入学後の学生生活に役立つ学びといった点で一定の効果を認めることができた。キャリア形成学科の入学前課題では、前述のように幅広い志向性をもつ多様な学生の個性や能力を伸ばし、将来の職業への方向づけや意志決定を早期に行うことが目指されているが、この目論見は卒業生のインタビューを利用した本課題において、かなりの成功を収めていると言えるだろう。

(4) 新聞課題

新聞課題では、聞き取り調査で「新聞課題は面白かった。量もちょうどよく、最後は「やりきった」という思いがあった。やってよかった」「新聞課題は、新聞を読むことはあまりないいい機会になった」という声があり、満足度でも「満足」と答えた者が1名いた(表1)。この課題については、同内容のものを実施した前年度にも、聞き取り調査で「この課題をきっかけに、就活など、高校時には気にしなかった記事を意識するようになった」「面倒だったが、真剣にやった。やってみたら楽しかった。提出できて満足している」という声があった⁸⁾。ここからは、学科の専門知識と関連性のある新聞記事を探し出す中で出口となる職業領域を意識し、課題に取り組む中で充実感や達成感を感じられる者が一定数いることがうかがえる。

ただし、全体の傾向として新聞課題は量が多く(表2)、難しく(表3)、それほど面白くない(表4)と捉えられており、満足度も「満足」を選んだ1名を除くと「どちらともいえない」が3名、「不満」が1名と、他の課題と比べて低めであった(表1)。新聞課題の満足度が低くなる要因として、前年度に行った考察の中では、課題と大学の学びのつながりが理解されず、課題が生徒たちに「高校の学びの反復」として捉えられたことを指摘した⁹⁾。そのために、2017年度は新たに高校の三者面談や説明会で課題の目的を説明し、さらに『アリーテ姫の冒険』の課題やインタビュー課題によってキャリア形成学科の学びを意識させる工夫を行ったのであるが、今回の聞き取り調査でもやはり「新聞課題は何のためにやるのかが分からなかった」という声はなくならなかった。

キャリア形成学科は社会に対する意識と関心を向上

させることを一つの教育目標としており、そのために新聞を読み、内容を理解して的確に要約することを求める課題を入学前に課してきた。しかし教員の関わりがない自宅学習でこうした指導を行うことには限界があって、社会に対する意識や関心は入学後に授業を通じて培っていくのがより効果的で、望ましいという可能性もある。いずれにしても、この点については引き続き調査と分析が必要である。

IV おわりに

前稿でも指摘したように、日本リメディアル教育学会が全国の大学を対象に行った2011年のアンケートにおいて、入学前教育の実施目的として最も多く挙げられるのは「AOや推薦で入学してくる生徒の学力維持・向上」(84%)であった¹⁰。しかしながら、千島・水野(2015)が指摘するように、新入生のアパシー傾向の抑制と大学環境への適応促進のためには、大学入学という目標に代わる「次なる目標を、大学生活の中で設定できるような支援」が必要であり¹¹、したがって入学前課題も学科の学びの理解を促進し、目標意識を高める内容に変革していくことが望ましい。

そうした中で、2017年度に開発した新入学前課題では、とりわけインタビュー課題を中心に、「現代を生きる女性の生き方や働き方について考えさせ、職業意識の醸成をうながす」という目標に対して一定の効果が確認できた。聞き取り調査の中では「『アリーテ姫の冒険』も面白かった。アリーテ姫をロールモデルとして読んで、それを先輩のインタビューと比較するという読み方もした。課題に一貫した意図が感じられた」という声もあった。多様な課題を実施する中で、課題全体を通して、キャリア形成学科の教育への理解、大学の学びへの意識の向上、職業意識の醸成といった効果が確認できたことは大きな収穫である。今回の調査は主観評価であり、対象者も少ないため十分な信頼性があるとは言えないが、前年度に開発した入学前課題と比較したとき、キャリア形成学科が描く高大接続の理想に一步近づいたことは確かであるように思われる。

最後に、この入学前課題を今後継続していく上で重要と思われる点を述べる。今回の課題は、初回提出時の課題(課題1)では全員が提出したが、2回目の提

出時の課題(課題2と課題3)では1名が2ヶ月遅れの提出、1名が最後まで未提出という結果となった。これは、初回の提出時は高校の教員が自発的に大学に協力し、生徒たちに提出を促した一方で、2回目の提出時には生徒たちが卒業して高校の教員の手を離れてしまったためだと考えられる。そうであるとすれば、卒業後の課題提出にいかん強制力を持たせるかが今後の課題となるだろう。また、高校教員による課題提出の促しなどの協力が自発的なものにとどまるかぎり、今後担当者の変更があった際に従来通りの取り組みが続けられなくなる可能性もある。今後高大連携を持続的かつ安定的なものとするためには、高大で締結を結び、入学前課題の配布や説明会の実施、添削等の実施主体、高校教員の役割といった事項について、具体的な連携のあり方を明文化することも必要であろう。

以上の考察を踏まえて、キャリア形成学科では引き続き学科の学びに相応しい入学前課題のあり方を求め、課題の改善を行っていきたい。

注

- 1 中央教育審議会(2014), pp. 2-5.
- 2 同上, p. 10.
- 3 同上, p. 3. ただし、土井も述べるように、従来の教育や入学者選抜のあり方に対するこうしたラベリングには「ステレオタイプの嫌い」(p. 11)もあり、より正確な現状認識を行う必要がある。同様の指摘については、中村(2018)も参照。
- 4 中央教育審議会(2014), p. 5.
- 5 この取り組みについては、酒井・藤田編(2018)を参照。
- 6 藤田ほか(2017), p. 32.
- 7 集中練習よりも間隔を空けた練習の方が効果的という研究結果については、ブラウンほか(2016; pp.54-72)を参照。
- 8 藤田ほか(2017), p. 32.
- 9 藤田ほか(2017), p. 33.
- 10 穂屋下ほか(2012), p. 6.
- 11 千島・水野(2015), p. 237.

引用文献

- 酒井浩二・藤田大雪編（2018）『日本学術振興会 大学教育再生加速プログラム 平成29年度年次報告書』京都光華女子大学.
- 千島雄太, 水野雅之（2015）「入学前の大学生活への期待と入学後の現実が大学適応に及ぼす影響」『教育心理学研究』63（3）, pp. 228-241.
- 中央教育審議会（2014）『新しい時代にふさわしい高大接続の実現に向けた高等学校教育、大学教育、大学入学者選抜の一体的改革について：すべての若者が夢や目標を芽吹かせ、未来に花開かせるために（答申）』
http://www.mext.go.jp/b_menu/shingi/chukyo/chukyo0/toushin/_icsFiles/afieldfile/2015/01/14/1354191.pdf
- 土井真一（2016）「中教審高大接続答申から考える——大学入学者選抜制度の改革を着実に実現するために」, 東北大学高度教養教育・学生支援機構編『高大接続改革にどう向き合うか』東北大学出版会, pp. 7-31.
- 中村高康（2018）『暴走する能力主義——教育と現代社会の病理』ちくま新書.
- 藤田大雪・佐藤綾花・吉田咲子・小澤千晶・知念葉子・高野拓樹・長者美里（2017）「内部進学者を対象とした入学前教育プログラムの開発：光華女子学園における高大連携の取組」『京都光華女子大学京都光華女子大学短期大学部研究紀要』55, pp. 29-36.
- ブラウン, P.・ローディガー, H.・マクダニエル, M.（2016）『使える脳の鍛え方——成功する学習の科学』依田卓巳訳, NTT出版.
- 穂屋下茂・小野博・米満潔・竹内芳衛（2012）「全国の大学対象のアンケート実施とその結果（2011年度）」『リメディアル教育研究』7（1）, pp. 3-16.

入学前課題

課題 1：日本語課題 『アリーテ姫の冒険』を読む

設問 1：下記①～②①のチェックポイントを手がかりにして、解答冊子（別冊）の原稿用紙に『アリーテ姫の冒険』を要約してください。要約の中ですべてのポイントに触れる必要はありません。

物語のチェックポイント

…物語というものはすべて「はじめ」「なか」「おわり」という3つの要素で構成されています。①～②①は、物語の進行上とくに重要なポイントを要素ごとに抜き出したものです。

はじめ … 状況設定（登場人物や舞台背景の紹介など、物語の前提を説明する）

- ①王さまはどんな人か
- ②王さまはアリーテ姫にどんなことを習わせたか
- ③王さまがそれらの習い事をさせたのは何のためか
- ④アリーテ姫は、それらの習い事の何をどう感じたか
- ⑤アリーテ姫が好きなことは何か
- ⑥王さまは、なぜアリーテ姫を早く結婚させようと思ったのか
- ⑦求婚にきた王子たちは、アリーテ姫にどういう印象を持ったか
- ⑧王子たちがそういう印象を持ったのはなぜか

なか … 物語の展開（あと戻りのできないことが起こり、物語が動き出す。主人公は運命に立ち向かう）

- ⑨魔法使いボックスはどんな人か
- ⑩結婚の決定までに、ボックスと王さまの間にどんなやりとりがあったか
- ⑪そもそもボックスは、なぜアリーテ姫との結婚を望んだのか
- ⑫結婚の話聞いてアリーテ姫は誰に相談に行ったか
- ⑬アリーテ姫はその相談相手から何を得たか
- ⑭アリーテ姫が閉じ込められた部屋はどんな状態だったか
- ⑮そのような部屋でアリーテ姫が快適に過ごせたのはなぜか
- ⑯アリーテ姫は3つの願い事を何に使ったか
- ⑰アリーテ姫がボックスから与えられた3つの難問は、それぞれどのようなものだったか
- ⑱アリーテ姫はそれら3つの難問をどうやって解決したか

おわり … 結び（主人公が直面する問題が解決して物語が完結する）

- ⑲ボックスの最期はどのようなものだったか
- ⑳アリーテ姫は何のために旅に出たのか
- ㉑アリーテ姫に王さまになることを断られて、残された人はどうしたか

参考資料 2 日本語課題の抜粋 2

入学前課題

設問 2 : A から C の考えるポイントに答えてください。その上で C に書いたことを発展させて、物語の感想を解答冊子（別紙）の原稿用紙に書いてください

考えるポイント

A. なぜアリーテ姫は、3 回の願いごとを、難問を解決するのに使わなかったと思いますか。

（下書き用）

B. あなたはアリーテ姫の問題解決方法をどう思いますか。騎士たちの方法より良かったと思いますか、良くなかったと思いますか。理由とともに書いてください。

（下書き用）

C. 『アリーテ姫の冒険』は、あなたの生き方や、あなたの将来を考える上で、どのようなことを教えてくれますか。A と B に書いたことも踏まえて、あなたが『アリーテ姫の冒険』から学んだことを書いてください。

（下書き用）

